

受動名詞と DP 分析

阿 部 幸 一

Passive Nominal and DP Analysis

Koo-ichi Abe

Originally speaking, the X-bar theory is proposed by Chomsky(1971) in order to explain the similarity between S(entential) structure and N(oun) P(hrase) structure, but thereafter conversely the difference between S structure and NP Structure is rather emerged through the elaboration of the X-bar theory by Jackendoff(1977), Stowell(1981), Chomsky(1981, 86) and so on. In particular, Chomsky(1986) postulates that the head of the sentence is I(nfl) and the sentence itself is analyzed as IP. On the other hand, the noun phrase is still analyzed as the NP structure having N as the head. As result, the original idea about the similarity between S and NP in the X-bar theory is now obscured.

Recently, against this stream, Abney(1987) and Fukui(1986) suggest the noun phrase structure which resembles S structure. They analyze D as the head of Noun Phrase, and so their analyses are called as DP Analysis.

From the view point of such a small field as “passive nominal”, DP Analysis can explain the similarity between passive sentences and passive nominals. Then we proceed this paper in the form of the application of DP Analysis to passive nominals.

0. 序

本来, Chomsky (1970) に端を発する X-bar 理論は, 文 (S) 構造と名詞句 (NP) 構造の類似性を説明するために考えられたものであるが, その後, Jackendoff(1977), Stowell(1981), Chomsky(1981) などを経て, Chomsky (1986) に至って, 逆に, 文と名詞句との違いの方が前面に出てきた。特に Chomsky (1986) では, 文の主要部は I (NFL) と考えられ, 文自体は従来の S に変わって IP と分析されることになった。一方, 名詞句は N を主要部としてもつ NP 構造のまま, その結果, 文と名詞句の類似性がはっきりしなくなった。

これに対し, Abney (1987), Fukui (1986) らは, 名詞句にも文同様の構造を仮定することによって, 両者の類似性を高めている。そして彼らの分析では, 機能範ちゅうの D が名詞句の主要部となっているので, その分析は DP 分析と呼ばれている。

DP 分析にしる, 従来の NP 分析にしる, それぞれ一長一短があるので, ここではその詳細には入り込

まない。但し, 受動名詞という限られた世界から見ると, 対応する受動文との類似性を説明できる分析の方が優れているのは明らかで, その点から考えると DP 分析の方が好ましいことになる。そこで本稿では, DP 分析の受動名詞への適用という形で論を進めて行くことにする。

1. 受動名詞と X-bar 理論

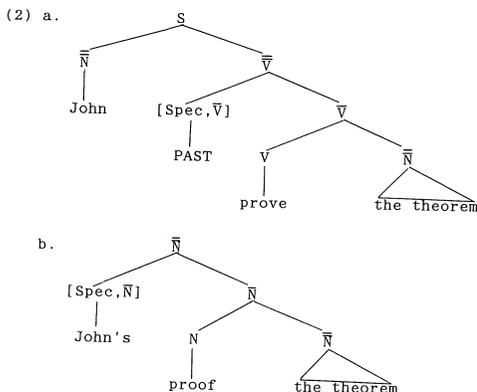
受動名詞とは, 例えば(1)に見られるように, 名詞句内で受動化が適用されたもので, 近年, Roberts (1985), Jaeggli(1986), Roeper(1987), Endo(1988) 等で議論の的になっている。

- (1) a. Rome's destruction by the barbarians
b. the destruction of Rome by the barbarians
cf. c. Rome was destroyed by the barbarians

受動名詞 (1a, b) と受動文 (1c) の間に共通する受動構文の本質については, 阿部 (1989) で述べた

ので、ここでは触れない。ただし、受動化という現象を考えるならば、受動名詞にも受動文にも同等の操作が適用されていると考えるのが、一般的な考えであるので、言語の句構造として規定されている X-bar 理論にもとづいて、名詞句についても文についても同等の受動化が適用していると考えるのが自然のように思われる。

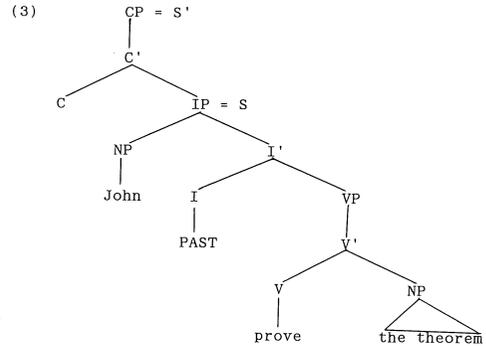
そこで、ここでは X-bar 理論そのものを議論する必要があるのである。Chomsky(1971)自身は、名詞句(NP= \bar{N})と文(S)との類似性を示すために、X-bar 理論を提唱したのであった。例えば、(2)の例からわかるように、主語と目的語の構造上の位置関係には平行性が見られる。すなわち、Sに直接支配されている \bar{N} が文の主語であるのと同じように、 \bar{N} に直接支配されている[Spec, \bar{V}]が名詞句の主語である。また、 \bar{V} に直接支配されている \bar{N} が目的語であるのと同じように、 \bar{N} に直接支配されている \bar{N} が目的語である(ofは後で挿入される)。



ただし、ここにおいて文と名詞句が完全に並列的であるとはいえない。特に、名詞句の場合には、主要部がNであり、主語と目的語との関係がNの投射(\bar{N})内で示されているのに対し、文の場合には、主語と目的語の関係は、目的語はVを主要部とする投射(\bar{V})内で示されているが、主語は主要部のはっきりしない投射(S)内で示されている。

その後、X-bar 理論については、理論内部においていろいろ議論され、Jackendoff (1977)では、すべての範ちゅうにわたって3レベルからなる構造が提唱され、Chomsky (1981)では、文の主要部をIとする分析が提案され、Stowell (1981)では、統語理論でどのみち必要な格理論などにより、より簡潔な

句構造が仮定され、そしてChomsky (1986)に至って、従来語い範ちゅうに限られていた X-bar 理論を、機能範ちゅうであるIやCにまで拡大する考えが示され、現在に至っている。例の(3)は、Chomsky (1986)の文の分析を示す。



こういった X-bar 理論内の変遷に伴って、文構造自体はかなりの変化を受けたが、Chomsky (1986)においては、名詞句構造は従来そのままとなっていた。したがって、当初の X-bar 理論にみられた文と名詞句の類似性((2)の a, bの例)は、今や、(3)と(2b)となっており、特に(3)においては、(2a)よりさらに複雑となり、文の主語は、目的語を含む投射(VP)とは別の範ちゅうである投射 IP に直接支配されることになって、従来みられていた文と名詞句との類似性がはっきりしなくなり、むしろ異質な感じさえ与えている。

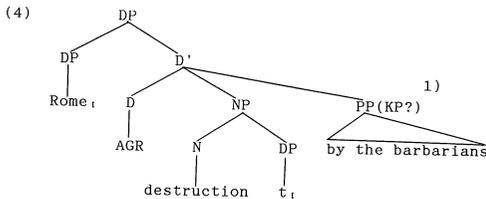
Chomskyの推す(3)の構造は、それなりに論拠があるのである。受動構文に共通の受動化を考えるならば、(3)の構造に類似の(2b)の構造を想定しなければならない。その1つがDP分析と呼ばれるものである。そこで、次の章では、受動名詞にDP分析を適用するという方法で議論を進めてゆくことにする。

2. DP 分析

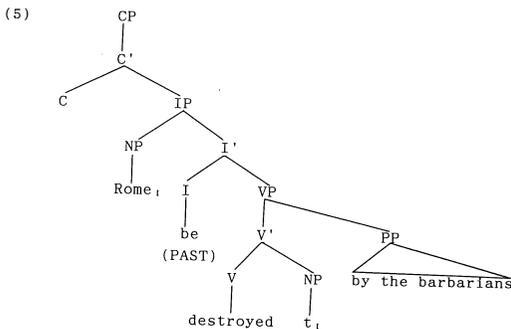
DP分析と呼ばれるものにも、いろいろな考えがあって、どの分析が望ましいか一概に言えないので、この章では、その代表的なものとして、Abney (1987)、Fukui(1986)と今井他(1989)及びTakano (1989)を取り上げて、受動名詞をめぐる比較検討する。

2. 1. Abney (1987)

Abney の分析は、一言で言えば、「文における主要部の I に対応するものとして、名詞句の主要部に D を導入する」ことである。例として (1a) にもとづいて、Abney の DP 分析に従うと次のようになる。

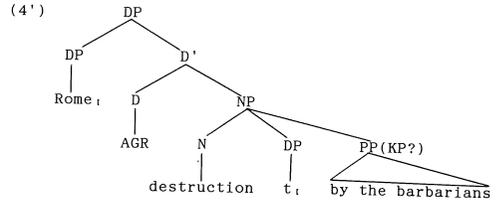


ここで、DP の指定辞の位置にある Rome は、N である destruction の姉妹 (sister) 関係にある、いわゆる目的語の位置にあたる DP の位置から前置されたものと仮定される。そして、指定辞の位置で、D の下の AGR より格を付与されると考えられる。by-phrase の位置は明確ではないが、NP の下に生成された DP よりも、N に対して緊密ではないので、それより上の節点である D' の下に生成されると仮定する。ここでは比較対照のため、Chomsky (1986) の枠組みにもとづく受動文の分析を上げる。



(4)と(5)の対比からわかることは、指定辞の位置にある Rome, すなわちその構造の主語に関して、それぞれ、名詞句では D が、文では I が格付与にかかわっている点で平行性がみられる。また目的語についても、文と名詞句では平行性がみられる。しかし、by 句の扱い方について相違がみられる。(5)の by 句の位置が意味関係からしても正しいとする (あくまで

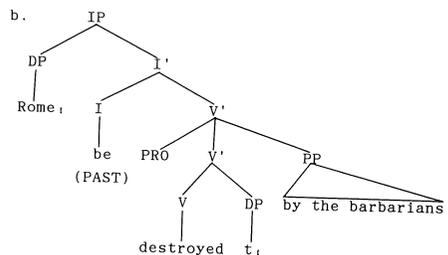
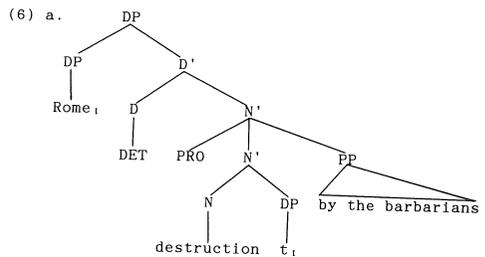
by 句が主要部 V の投射内にあるとする) と、(4)の構造では、by 句が主要部 N の投射外にある点で問題となる。また、(5)に近い構造として(4)を(4')のように変えたとしても、



(5)にみられた目的語と by 句の相違が、(4')では見られない点でやはり問題が残る。

2. 2. Fukui (1986)

Fukui の分析は、Abney 同様 D を名詞句にも導入している点で、DP 分析と考えられるが、Chomsky (1986) に対抗して、X-bar 理論において、機能範ちゅうと語い範ちゅうを明確に区別し、さらに従来とは異なり、主語も目的語同様に内部項と考えることにより、文構造にも変更が与えられている点で、かなり異質な感じを考える。次の(6)は、Fukui の分析にもとづく受動名詞と受動文の構造の例である。



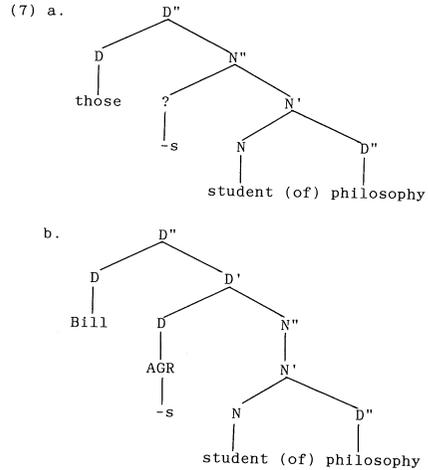
この分析においては、目的語前置のしかたや格の付与のされ方は、Abney 同様で、とくに問題はない。Abney の分析と異なるところは、PRO の存在である。Fukui によると、この PRO が現われる位置は、従来は外部項とされていた主語が内部項化されたことによって生じた、D 構造の位置である。この位置は格をうける位置ではないので、通常の場合、内部項である主語は、格をもらうために、いわば外部項の位置である指定辞の位置へ前置されることになっている。ところが受動構文の場合には、移動されるべき指定辞の位置へ、本来の内部項である目的語が入っているので、PRO は移動できずに D 構造の位置にとどまる。(PRO は、格を必要としないので、この位置にあっても格理論そのものには抵触しない。)そして、受動構文の場合には、本来の外部項である動作主 (Agent) が表わされないことがあるので、この PRO は、いわば暗黙の項 (implicit argument) として働く。ところが(6)の例では、PRO の他にも by 句という明示的な動作主がきているので、何らかの形で PRO と by 句との同一指標付与 (coindexing) を受けて、PRO と by 句は同一のものと解釈されることになろう。

とにかく、動作主としての PRO 導入そのものは、by 句のない受動構文における暗黙の動作主を想定しうる点で、Abney の分析より望ましいと思われる。また、Abney のところでは問題となっていた by 句の扱いも、目的語と by 句の相違が表わされている点で望ましいものとなっている。ただし Fukui では、V や N などの語い範ちゅうの場合には、シングル・バー (プライム) レベルでのくり返しは許されるが、最大投射としての VP や NP などの節点が存在しない。一方、I や C などの機能範ちゅうの場合には、逆にシングル・バーレベルでのくり返しは許されないものの、最大投射としての IP や CP が存在している点で、X-bar 理論について問題がある。そして、普遍的な句構造を規定しようという X-bar 理論の立場からすれば、語い範ちゅうと機能的範ちゅうで投射のしかたが異なるということは、望ましくないことになる。

2. 3. 今井他 (1989) 及び Takano (1989)

今井他 (1989) の主張によると、Abney (Fukui) の分析も含まれると考えられる) の仮定する、名詞句の DP (=D') の中に NP (=N') が埋め込まれて

いる、いわば2層からなる DP 分析は、(7a, b) にみられるように、(7a) で those を D に該当させると複数の -s の行き場がなくなって、(7b) とのパラレルな関係がなくなるとしている。



また、この主名詞と決定詞との一致の捉え方は、(8)の文の主語と動詞との一致に比べて、かなり不自然なものとしている。文においては、主語と動詞の形態上の一致は、I の中にある AGR の素性によって媒介とされる。そして I は指定部—主要部一致 (Spec-Head Agreement) により、指定部の主語 John と一致する。又、V 線上げにより、動詞が I の中に入って、その素性をうけて、John plays tennis が生成される。

(8) John [_I-s] play tennis

+Present
-Plural
+3rd person

その他、(9)にみられるような指定代名詞と所有代名詞が共起する表現を挙げて、Abney の DP 分析では所有格の名詞句は D の左側にしか生じないので、(9b) の this our という連続の存在が説明できないとしている。

(9) a. se heora cyning (=the their king)

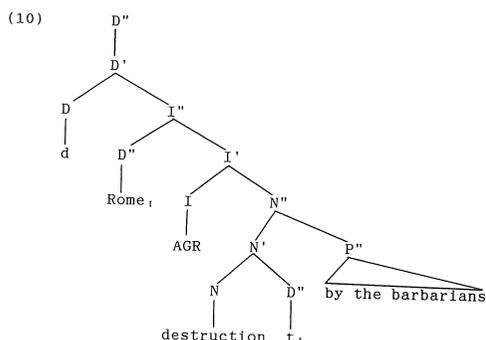
(古英語)

b. on this our wedding day

(現代英語)

以上のことを説明するために、D' と N' の間にもう一つの層として I を含む層を仮定する。そしてこの I は、文において主格を付与する I に相当する要素と考える。そしてこの3層になった名詞句構造を想定する分析を、拡大 DP 分析と呼んでいる。

この分析にもとづいて、受動名詞を考えると次のような構造になると思われる。



(10)でdは、ゼロ決定詞を表わす。

この分析は、まさしく Chomsky の受動文の分析である(5)に並列的なものである。共に主要部が I となっており、それが指定辞の位置にある Rome に格を付与することになる。但し、この分析で問題となるのは、Fukui で仮定されていた暗黙の項である PRO を、どうするかということである。

次に、Takano (1989) をみてみると、DP 構造は I を導入するという点で、基本的には今井他の分析とかわらない。ただ、DP を移動現象に関して barrier と考える点で、一歩ふみこんだ分析となっている。

- (11) a. ? * What manner_i did you witness [_{DP} the destruction of the city in t_i]
 b. ?? What manner_i do you believe [_{CP} that John sang the song in t_i]

これら DP 分析間の相違は、Abney や Fukui が、従来の X-bar 理論では S に当たる IP に類似のものとして、DP を仮定したのに対し、今井他や Takano は、従来の \bar{S} に当たる CP に類似のものとして、DP を仮定したことによる。どちらの DP 分析がよいかは、広い現象を考慮に入れないと、完全には決定できないが、Takano の示すように、DP と CP との間

で barrierhood について共通性がみられるならば、今井他及び Takano の拡大 DP 分析の方が、好ましいことになる。

そこで次の章では、拡大 DP にもとづいて受動名詞を考えた場合の、暗黙の項などのとり扱いについて考えてゆくことにする。

3. 代案

受動名詞において暗黙の項が必要なことは、次の例のように受動名詞(受動文同様)の後に理由節が来た場合に、明示的な動作主が現われていない場合でも、何らかの暗黙な動作主が理由節をコントロールしていると考えられるからである。

- (12) a. Rome's destruction (by the barbarians)
 [to prove a point]
 cf. b. Rome was destroyed (by the barbarians)
 [to prove a point]

暗黙の項について、Jaeggli (1986) では受動文の場合に、受動接辞 (passive suffix) の-en が、暗黙の外部項として機能を果し、格吸収 (Case absorption) にかかわっていると考えている。Baker, Johnson & Roberts (1989) では、Jaeggli が-en を V に付与されていたのに対し、彼らは-en が D-構造で I の位置に生成される項であるとし、その後 V に編入 (incorporate) されるとしている。Fukui (1986) は前章の(6)でみられたように、従来の外部項とは異なる位置に、内部項化した外部項の PRO を受動文、受動名詞共に想定していた。ただし、Fukui では、その外部項が格吸収にかかわるとは考えていないようである。

また、Roberts (1985) では、(13)のように動作主のないものは、一種の existential quantifier として解釈されたと考え、項である-en と chain をなす一種の empty operator として e を導入している。

- (13) a. Mary was kissed.
 = b. Mary was kissed by someone.

さらに、Abney (1987) では、動詞的受動形 (verbal passive) と形容詞的受動形 (adjectival passive) を区別するために、形容詞的受動形には受動接辞の-en の他に、抽象的要素として EN を仮定している。-en

は、格を吸収する接辞であるのに対して、EN は、形容詞の統語素性を表わしている²⁾。

ここでも、受動名詞の暗黙の項の分析として、どれがもっともふさわしいか即断はできない。Jaeggli も Baker, Johnson & Roberts も、受動名詞そのものを扱っていないが、同様の分析を受動名詞にあてはめたとすると、受動名詞には受動接辞として-en をもっていないので問題を生ずる。Endo (1988) のように名詞の派生接辞である-tion を受動接辞とする考えもあるが、これはいろいろな点で問題がある(阿部 (1989) 参照)。ただし、その点が解決がつけば、受動名詞に対して有望な分析になり得る。

Fukui の分析では、受動文も受動名詞も共に PRO という暗黙の項を設定しているの、その限りではよさそうに思える。しかし、受動接辞に対する扱いが明示的でなく、Chomsky (1981) 同様、受動接辞を含む動詞全体が格吸収にかかわっていると考えると、何が受動名詞の格吸収にかかわっているか明確にする必要がある³⁾。また拡大 DP 分析を受動名詞に適用した場合に、Fukui の内部項化した外部項をそのまま適用することは不可能のように思われる。

実際には、Roberts の分析と Abney の分析は、その目的も内容も少し異なっているが、両者共に本来の受動接辞の他に別の要素を仮定する点で似ていると思われる。このいわば受動要素の分割化は、受動名詞にとっては有望な分析のように思われる。なぜなら、受動名詞の場合には受動接辞がないので、せっかくの Jaeggli らの受動文における巧みな説明も、受動名詞には適用できないという問題があった。ところが、受動接辞の-en の他に、受動を示すいわば operator として EN を想定すれば、受動文も受動名詞も同等に扱えると思われる。

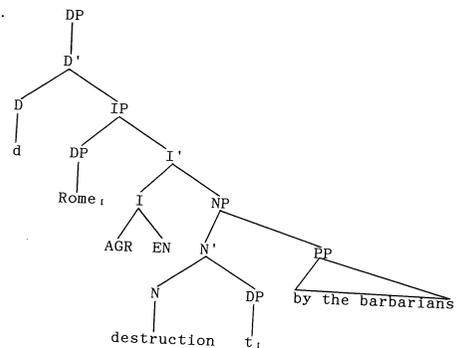
すなわち、受動名詞が受動文と異なるところ、受動名詞には受動接辞がないことは、受動名詞に-en を仮定しないことで説明できる。一方、受動名詞も受動文も共に暗黙の項をもちうる点については、一種の empty operator として EN が共通にあるとすれば説明がつく。そして、受動名詞の場合には、その EN が理由節をコントロールすると仮定する。受動文の場合には、(EN_i, -en_i) という連鎖 (chain) が理由節をコントロールすると仮定しうる。

以上の考えを拡大 DP 分析にもとづく受動名詞にあてはめるわけであるが、EN をどの位置に生成さ

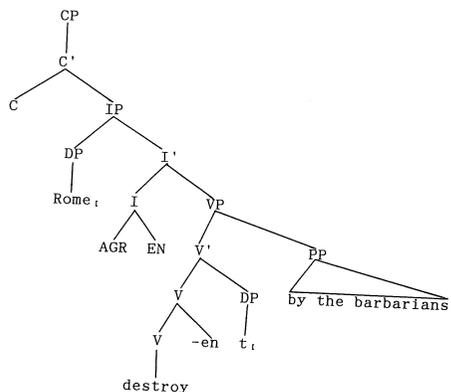
せるかについて考える必要がある。EN は理由節をコントロールするために、統語的には理由節を c-統御する位置にあると考えられる、そして、Baker, Johnson & Roberts 流に、論理的な主語の θ 役割を与えられる位置とするならば、I の下に生成されることになろう。また、受動接辞をもつば格吸収にかかわる要素であると仮定することもできる。するとまさしく、受動文と受動名詞は暗黙の外部項として EN を I の下にとっている点で並列的であり、受動名詞と受動文の格吸収のちがいは、受動文が受動接辞の-en により格吸収するのに対し、受動名詞は受動接辞の-en をもたないが、注の3)で仮定するように、名詞のもつ非格付与素性[+N]が格吸収するとすれば、両者をうまく扱うことができる。

以上の考察に基づいて、拡大 DP 分析にもとづく受動名詞の構造を次に示す。比較のため、受動文の構造も掲載する。

(14) a.



cf. b.

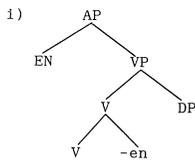


4. まとめ

本稿で明らかになったのは、次のことであると了解する。i) 受動名詞と受動文の類似性(平行性)をもっともうまく表わすためには、拡大DP分析を導入する必要がある。ii) 受動名詞に拡大DP分析を適用した場合、暗黙の項の扱いが問題となる。しかし、受動接辞-enの他にempty operatorとしてENを導入することによって、問題が解決される。

注：

- 1) Abneyでは、of挿入以外にも基底生成の分析の可能性を考慮して、KPという節点を上げている。ここでKPとは、格を付与される句の意味である。これに関して、中村・金子・菊地(1989)では、the enemy's destruction of the cityのof句のofは、主題(theme)であることを語法的にspell outしたものと考えて、Abney同様、ある意味でad hocなof挿入をなくすことを考えている。そして、もしこの分析がby句にもあてはまるとすると、by句のbyも実は動作主を語法的に示したために、spell outされたと考えうる。すると、of句もby句も共に名詞句(DP)とされることが可能である。
- 2) Abney(1987, p.260)では、次のような形容詞的受動形の構造を考えている。



ここで、-enは格を吸収するが、-en自体は統語範ちゅうではないので、V-en全体はVの範ちゅうをもつことになる。一方、ENは形容詞の統語素性をもつとされる。

- 3) 受動名詞の格吸収に関しては、阿部(1989)同様に、Endo(1988)のような-tionを受動接辞として、格吸収するというような分析をとらず、Nが非格付与素性として[+N]をもっているため、それが格吸収を行なうと考えることにする。

参考文献

- 阿部(1989)「受動名詞をめぐって」『I V Y』22巻, 143-160.
- Abney, S. (1987) *The English Noun Phrases in Its Sentential Aspect*. Doctoral dissertation, MIT.
- Baker, M., Johnson, K. and Roberts, I. (1989) "Passive Arguments Raised," *Linguistic Inquiry* 20, 2, 219-251.
- Chomsky, N. (1970) "Remarks on Nominalization," in (R. Jacobs & P. Rosenbaum eds.) *Reading in English Transformational Grammar*, Grim and Company, Waltham, Mass.
- Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, N. (1986) *Barriers*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Endo, Y. (1988) "On Implicit Arguments in Derived Nominals," *Tsukuba English Studies*, 7, 141-158.
- Fukui, N. (1986) *A Theory of Category Projection and Its Applications*. Doctoral dissertation, MIT.
- 今井・中島・外池・福地・足立(1989)『一步すすんだ英文法』東京：大修館書店
- Jackendoff, R. (1977) *X̄ Syntax: A Study of Phrase Structure*, Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Jaeggli, O. (1986) "Passive," *Linguistic Inquiry* 17, 587-622.
- Lebeaux, D. (1986) "The Interpretation of Derived Nominals," *Chicago Linguistic Society* 22, 231-247.
- 中村・金子・菊地(1989)『生成文法の基礎—原理とパラミターのアプローチ』東京：研究社出版
- Roberts, I. (1985) *The Representation of Implicit and Dethematized Subjects*, Doctoral dissertation, Univ. of Southern California.
- Roeper, T. (1987) "Implicit Arguments and the Head-Complement Relation," *Linguistic Inquiry* 18, 267-310.
- Safir, K. (1987) "The Syntactic Projection of Lexical Thematic Structure," *Natural Lan-*

guage and Linguistic Theory 5, 4, 561-601.

Stowell, T. (1981) *Origin of Phrase Structure*.

Doctoral dissertation, MIT.

Takano, Y. (1989) "Some extensions of the DP hypothesis," *English Linguistics*, vol. 6, 90-110.

安井 (1989) 『英文法を洗う』東京：研究社出版

(受理 平成2年2月20日)